

弟子たちと果実 インドの古典物語より

ある同じ小さな村から、二人の少年たちが、尊敬を集める教師であり精神の師である人物が住む森の僧院を訪ねて一緒に歩いていました。当時の伝統として、この二人のブラーミンの生徒たちは、後に若い僧として故郷に戻る前の数年間、グルのアーシュラムに居住し、グルの元で学ぶために、向かっていたのです。

丸一日歩いた後、アブヘイとキルタンは、土曜日の午後遅くにアーシュラムにたどり着きました。グルは、数名の弟子たちに囲まれて、庭で座っていました。

グルは、「神はあらゆるところにあり、神はあらゆるものにある」という教えについて解説していました。このサツァングが終わると、グルは二人の少年たちに前に進み出るよう招きました。アブヘイとキルタンは、共にグルの前に出て、お辞儀をしました。

彼らが顔を上げると、グルは少年たちに一つずつ熟れたマンゴーを手渡しました。グルは彼らに笑いかけ、「では」と言いました。「誰もいないところで、この果実を食べなさい」

少年たちは再び頭を下げ、師にお礼を言いました。彼らはこの大切な祝福された贈り物であるプラサードを注意深く抱えて、自分たちが寝泊まりする小屋に向かいました。

「ええと、ここではマンゴーを食べられないね」と、キルタンは笑顔で言いました。「ここではお互いがいるからね」

「そうだね」と、アブヘイは言いました。「それぞれで、考えないといけないね」

二人は夕食に向かいながら、グルが彼らに与えた課題 —— 誰もいないところでマンゴーを食べる！ —— をどこで行なったらよいかと頭を悩ませていました。

夕食までに、キルタンは一つの計画を思い付きました。その晩、宿舎の中の誰もが眠りに落ちた後、彼は毛布から抜け出し、暗闇の中、扉をそっと抜け出して、誰も寝泊まりしていないことを確認しておいた隣の宿舎へ向かいました。そして、一人きりであることを確信し、なんと賢いことを考えたと思いながら、キルタンは果汁たっぷりのおいしいマンゴーを食べました。

アブヘイは、そう簡単にはいきませんでした。プラサードを食べようにも、誰もいない場所というグルの指示に沿うような場所を思い付くことができませんでした。グルの教えが彼の頭の中で繰り返されていました。「神はあらゆるところにある。神はあらゆるものにある」。この教えを以前にも聞いたことはありましたが、グルから直接聞いたことで、それは新たな形で頭の中に定着しました。このマンゴーを食べている時も、神は自分と共にいるのではないだろうか。

これは、確かに難問でした。そこで翌朝早く、散歩に出てこのことについて考えることにしました。アーシュラムの野菜畑を通り過ぎ、森の中を歩いていると、グルの教えが彼の意識を満たしました。自然の静けさの中で、小川を緩やかに流れる水は、「私はあなたといいます」と言っているようでした。こずえの葉音を立たせる風は、「ここにいますよ」とささやいているようでした。そして、枝に止まり、彼の周りを飛ぶ鳥たちは、「あなたと一緒にいますよ」と歌っているようでした。アブヘイは歩きに歩き続けましたが、しかし、本当に一人だと感じる場所を見つけることはできませんでした。

マンゴーを抱えて歩きながら、彼はこの上なく幸せでした。今、感じているのは、神の存在ではないだろうか。アブヘイは、そうかもしれないと感じました。

その朝遅く、二人の少年たちが庭にいるグルの前に現れた時、キルタンは意気揚々としていました。

大きな笑顔で、彼は両手を広げてプラナムから顔を上げました。「あなたの指示に従いました」と、彼はグルに言いました。「あなたからのプラサードを食べる場所を見つけました。そこには絶対に誰もいませんでした！」

グルはうなずき、それからアブヘイに顔を向けました。「おまえはどうかな」と、彼は尋ねました。「マンゴーをどうしたかね」

アブヘイは、グルが直々に彼に与えた指示に従わなかったことを痛感し、途方に暮れて地面を見ていました。

「ああグル・ジ」と、アブヘイは言いました。「ぼくは誰もいない場所を見つけようとしたのですが、どこに行っても優しい存在を感じたのです。誰もいないと感じる場所はありませんでした。ぼくと一緒にいるのは、もしかすると神かもしれないと思ったのです」。彼は深く息を吸い込むと、マンゴーを前に持って行き、こう加えました。「ぼくは、あなたが下さった果物を食べませんでした」

アブヘイが驚いたことに、グルはほほ笑み、手を伸ばして彼の頭をなでました。「少年よ」と、彼は優しく言いました。「まさしく、おまえと一緒にいたのは神だ。おまえは、神はあらゆるところにあり、すべての場所、すべてのもの、すべての存在にあるという教えを本当に理解したのだ」

キルタンはその様子を見ていました。この教えの真理は彼自身の心の中に根付き、彼の目は新たな理解を得て輝きました。

「では、アブヘイよ」と、グルはさらに満面の笑みをたたえて言いました。「そのマンガーを充分楽しんで味わいなさい」



語り: ガジュラ・マルケス
イラスト: ムウエンダ・クドウム

© 2018 SYDA Foundation®. 著作権所有。